



JASWHS 公益社団法人 日本医療社会福祉協会
Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 28 年 10 月 7 日 第 6 巻 (第 6 号)

発行：東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル 2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

1. 熊本地震・益城町での災害支援活動を引き継いで
2. 石巻現地担当着任から 5 か月が過ぎて
3. 男のあそぼう会報告
4. 災害支援チームからのお知らせ
5. 災害支援ニュース発行のお知らせ
6. あとがき

熊本地震で被災されたみなさま
心よりお見舞い申し上げます
復興への道のりがより短くなるよう
祈念いたします

1. 熊本地震・益城町での災害支援活動を引き継いで



前任者から引き継いだ益城町支援に携わって

期間 2016年7月11日 ~ 7月20日



災害支援チーム

石巻現地担当 岡村 翠

はじめに

ここ数年、日本では激甚災害が複数の場所で発生している。そしてまた、九州地方では初めての熊本地震が発生した。震度7の激震が、4月14日21時26分の前震、4月16日未明の本震、その後も震度6と続いた激しい揺れが被害を甚大なものにしてしまった。

私が到着した日は、雨が降っており、一時的に土砂降りになった。南国地方ならではの雨量に懐かしさを感じつつ、ブルーシートで保護された家屋はどうなっているのだろうかと心配になった。

熊本地震が起こった夜、石巻現地スタッフで熊本を想った。私は、どうか土砂災害と火災が起きませんようにと願った。東日本と比べると災害の規模は狭く、被害も少ない。日本医療社会福祉協会で支援を行うと決断された時には疑問を感じた。東日本大震災における災害支援チームの終結も見えない中で、地元の人たちの力で何とかするのはないかと思えたからだ。

畑中さんの熊本出向が決まり、石巻現地は慌てた。新メンバーの受け入れや事務所の引っ越しなど、通常業務の先行きに不安があった。しかし、災害支援チームとして熊本支援にかかわれることは有益なことだとも思った。熊本で活動し「私たちが災害ソーシャルワークをし続けることは重要だ」と実感した。

はびねずの様子

私が熊本で活動した期間は7月11日~7月20日の10日間。配属先は「益城町保健福祉センター（はびねず）」だった。報道でよく見かける益城総合体育館からは10分ほど離れた場所であり、総合体育館よりは熊本市内に近いところに位置している。保健福祉センターは総合体育館と異なり、益城町の職員や熊本県庁や岩手県からの派遣職員が事務所で基本的な避難所管理がされていた。県外から派遣されている保健師チームやJRAT、栄養士会などの朝ミーティングを益城町保健師が毎日運営し、益城町全体の医療福祉に関する支援状況の把握がおこなわれていた。

熊本被災の課題

この時期は、応急仮設が建設され、その鍵が渡されはじめていた。「応急仮設の受け渡し」の説明会を見学に行った。石巻の復興住宅入居説明会と類似する箇所がたくさんあった。行政の説明、保健師の挨拶、地元大学生の仮設訪問についてなど、心理健康面のフォロー体制についての説明。また、避難所や被災した家屋からの「引っ越し支援」をしてくれる団体の紹介や、JRATが手すりの取り付けなどの環境調整の相談受付なども伝えられていた。「引っ越し支援」をしてくれる団体からは、「断捨離についての講師を呼ぶ予定です」との話が聞かれた。東日本とは異なり、「住めなくなったが物はある」中での引っ越しの大変さを感じた。

また、「雨に濡れた家財道具をどうするのか」という問題も被災者は抱えていた。

支援したこと

仮設ができるまで避難所閉鎖に向けての動きが始まる。保健福祉センターや学校、一時的に避難所になっていたホテルが閉鎖に向けて動き出していた。保健福祉センター（はびねす）では再建意向調査が行われていた。福井さんが再建先未決定世帯の個別調査を行ってくれていたが、一部損壊や半壊で仮設への入居ができない世帯では7月12日頃までの雨で続き、家屋の取り壊しや瓦礫撤去の作業は進めない状況が続いていた。また、応急仮設の2次募集の結果待ち世帯も多く、避難所閉鎖の話も公にされていない中で、活動することの限界があった。直接的な相談支援ではないが、天候や行政の動きに焦りや不安を抱える被災者の傍らに続ける支援をしようと思った。具体的には、住民と益城町職員の方々にSWの存在を知ってもらおうということだった。避難所という生活場所で、プライバシーを侵害せずに、存在を認識し、受け入れてもらい、相談しよう（言葉にしてみよう）と思ってもらえる配慮を行った。

滞在し始めて4日程経った頃から、住民さんから声がかかりはじめた。1件目は応急仮設へ転居するにあたっての不安だった。相談の一言目は「ゆっくり寝させてほしい」であった。真摯に傾聴に勤めた。2件目は「家屋の片づけで身体疲労が高まり、段差がつらいため、応急仮設に手すりを付けてほしい」との話だった。JRAT、県外派遣の保健師さんから情報をもらい、避難所で確保された場所を移動することで事態は終結したが、相談者の疲労の背景には遺族であるという悲しみも大きかった。その他にも「年齢的に大きな声で話をしないと意思疎通が図れないが、集団生活であるため我慢している」と話す夫婦や、二次調査待ち

で再建方法を決められない方、病院から別の避難所に戻ったが元避難所の荷物の片づけがなかなか進まない等、被災生活を続けるうえでの様々な悩みだった。

「はびねす」内で行われた、国、県、町による会議に参加させてもらった。町の保健師さんたちは避難所の閉鎖に向けて計画が進んでいないことへの説明を求められ、責任感を感じ苛立っていた。天候や心理的不安、町としての動き、罹災証明が確定しない現状の中で、再建支援ができないことを伝えさせてもらった。被災地支援における移行支援は、「MSWの一般的なアセスメントに加え、罹災証明書が今後の生活再建に大きく影響する」という石巻支援の学びを活かすことが出来た。

現地で生活すること

石巻では2013年から2014年ごろ、公園の中にある仮設に住んでいたが、それが危険であると認識させられることが続いた時期があった。今回も、少し危険なことがあった。私の中では、「災害ソーシャルワークのリスクってこういうことだよな」と痛感する出来事だった。今の石巻に危険を感じることは少なくなってきたが、災害時にコミュニティが壊れると、生活の安全が失われる。隣は誰かわからない人が住み始める。私たちのような外部支援者が部屋を借りたり、震災で住居を失った人が隣で生活を始めたりする。地元住民からすれば、これまで安全だと思っていたコミュニティが失われることも大きな不安だなと思った。

私たちは日本協会理事の配慮でホテルに移り住むことになったが、当時ホテルも支援者の入れ替わりでなかなか確保できなかった。支援者も生活場所を安定させられない状況や、想定外の出費など日常性が保てない大変さが被災地支援にはあることを再確認した。

最後に

10日間熊本で活動できたのは、石巻での経験が大きいことを実感した。それは、現地活動だけでなく、日本協会の理事や事務局スタッフを知っている事、協力員の受け入れ時の大変さ、情報の混乱なども想定内の出来事として対応できたように思う。緊急事態には、石巻現地のスタッフ、理事、事務局から心配の電話をたくさんいただいた。

また、10日間、「はぴねす」一緒に活動し、たくさんの英知を授けてくださった石川県の中本富美さんや岩手県の山館幸雄さんのその姿勢を目の当たりにして、自分の被災地支援に自信が持てた。また、宮崎県からの協力員で九州地区の1人

の MSW としての熱い思いを語ってくれた小森有美子さん、熊本出身だが県外で働いている MSW の平方裕己さんの地元愛。東日本大震災での支援を経て熊本にも支援に来た協力員さんたち。災害ソーシャルワークが発展していることが分かり、本当にうれしかった。

熊本で被災した地域は、これから復興に向かって進むことになり、悩み多い日々や徒労の時間を過ごすことだろうと、石巻を経て思う。でも、たくさんの MSW が被災地のことを考え、復興を応援できるように「災害ソーシャルワークの確立にむけて」に微力ながらも尽力しつつけようと、決意新たになる日々だった。



2. 石巻現地担当着任から5か月が過ぎて



日々の会話に変化を感じて



災害支援チーム

石巻現地担当 金崎 慶大

“あがらいん”この言葉をここ石巻で初めて聞いた時から約5か月が経ちました。数か月前は、言葉の意味すら分からず先輩職員たちと仮設住宅を訪問していましたが、ここ数力月の内に少しずつ住民の方々の話を聞くだけでなく、“会話”ができるようになってきていると感じています。言葉の問題だけでなく、石巻の文化を知り、土地にも慣れてきたことで住民の方々とも打ち解けた話ができる場面も増えてきました。赴任して間もない



日和山公園から望む景色（昨年12月）

頃は、ここでより良い支援をしなければならないという気持ちや早く自分の立ち位置を把握しなければという考えが先立ってしまい、会話というより問診のようにある一定の枠でしか話ができいていませんでした。当たり前のことですが、こちらからの要件ばかりを優先して話しても相手にとってそれは相談ではなく、ただの聞き取りになってしまうのです。そんな時、“あがらいん”という言葉に出会いました。「ちょっと（私の家に）入っていきなさいな」といった意味合いの言葉で、初対面の私にもこの言葉を投げかけてくれる方は少なく



ありません。そんな住民の方々に対して私は、ホスピタリティを感じています。ホスピタリティとは、直訳すると款待・厚遇、相手への思いやりといった意味があり、日本でいう“おもてなし”という言葉がしっくりときます。ホスピタリティは、両者の相互満足があってこそ成立すると言われており、医療福祉の領域にも当てはまるものだと感じています。表面上での支援者と対象者の関係性だけでなく、お互いの立場を理解し、信頼し合える関係性を築くことで見出せるものも多くあると思っています。ここ石巻にはそんなホスピタリティの精神が存在しており、おもてなしの気持ちを日常的に感じることができる風習が地域に根付いているように思います。

現在、石巻市では仮設住宅集約に向け再建未定世帯に対して、「自立計画届出書」の提出をお願いしています。被災者の自立支援の促進に向けた取り組みや、各世帯の個別事情に応じた応急仮設住宅の供与期間を決定するための基礎資料として提

出率 100%を目指しており、私たちも未提出の世帯へ訪問し、再建先に悩んでいる方がいれば相談に乗っています。そして、訪問する中で聞こえてくる声も様々です。再建先や方法を計画的に考えている方もいれば、楽観的に捉えているように見える方もいます。また、相談させて頂きますという言葉に対して好意的な反応を見せて下さる方がいる一方、今更相談したところで何も変わらないと拒否的な反応を示す方もいます。現状に憤りを感じていたり、大きな不安を抱いている方もおられる中で、支援者として話を聞くことしかできない場面も少なくありません。私が関わる全ての方の訴えや思いを受け止め、叶えることには限界があり、全てを分かろうなんておこがましいとも思います。選択しなければならないことに目を背けていたり、自らを守るために他者を攻撃したりと、現実から逃避する方法は人それぞれです。喪失や失望といった感情にどう向き合うのか、その中で私がここにいる意味やできることを考えた時、「決められないことを否定しない」という想いを持つようになりました。様々な思いを抱えながらも現実を受入れ、顔を上げ、前に進もうとした時、そっと手を取り、同じ歩幅で歩ける存在でありたいと思います。

最後に。日和山から見える昨年の 12 月（初めて石巻を訪れた時）と現在の風景です。この半年の内に復興公営住宅が建設されています。ここから見える景色を見ると、変わっていないようで変わっているものがそこにはあり、その反面、変わらずにあるものを大切にしなければと、関わっている人たちの顔が思い浮かびます。





日和山公園から望む景色（現在）



3. 男のあそぼう会 報告



「9月 楽しい1日」の報告

実施日 9月21日



9月21日に男のあそぼう会を主催した。
先月は台風の影響で中止になったため2ヶ月ぶりの開催となり、久しぶりの会にみなさんお互いの健康を気遣い、近況報告をしていた。



今回の活動内容は調理

メニュー：さんまのから揚げ・里芋とイカの煮物・さんまのつみれ汁

今回初めて参加された方がいて、そのきっかけは6月のこの会の活動が新聞に取り上げられた事だという。常連のメンバーとどう打ち解けていかれるのか心配ではあったが、作業を通して会話をされていた。また、これまでのメンバーにはなかったことーi-padを使いこなし、レシピを調べながらー調理作業に取り組まれていたのは新しい発見だった。

※ 出発2日前までには（到着時刻等を含めて）は必ず現地担当にご連絡ください。

今後、活動に参加される方でその年度初回参加時には、簡単な資料を郵送致します。
ホームページに活動カレンダーを掲載しておりますのでご覧下さい。

事 務 所

引き続き募集しております。

平日のみの活動ですが1～2ヶ月に1回でも構いません。

ご協力お願い致します。

【2. 災害支援チーム会議開催のお知らせ】

次回会議日程

11月8日（火）予定

時間＝19：00～21：00 場所＝於協会会議室

【3. 書籍販売】

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』、
『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』、
『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』の

販売を行っています！

発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SW



との協働の記録を『バトンⅡ』に、

2013年1月から2014年3月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。

(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

ボタン I :URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

ボタン II :URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47

ボタン III :URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=54

【4. facebook】



facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いたします。

URL

<http://ja-jp.facebook.com/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部/156327867812970>

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。

URL

<http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be>



5. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回発行予定 10月下旬予定

6. あとがき

災害支援チーム事務局から

編集担当 富永

災害支援ニュースの編集担当になり、「つながる」ことの意味がこれほど大切なことなんだと実感しています。現地に行くことだけが支援ではない。ソーシャルワーカーがクライアントへ思いを馳せることと同じように、私も石巻へ思いを馳せています。

被災地での生活再建は、今までも様々な決断をしなくてはいけなかった人たちのなかで自力が困難な方々が寄り添える支援者が必要です。今年は、多くの災害がありました、各地で医療ソーシャルワーカーがその地での生活再建の支援してくださったらいいなと思います。



東日本大震災 MSW 災害支援ニュース
平成 28 年 10 月 7 日第 6 巻 (第 6 号)
作成 日本医療社会福祉協会
災害支援チーム事務局